

平成27年度 県立ろう学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習指導	授業の充実を図るとともに、家庭学習を習慣化させ、自ら学ぶ態度の育成に努める。	「家庭学習に関するアンケート」を実施し、実態を分析した。それを元に、各教科で具体的取組を考え指導した。また、担任を通して保護者にも協力を依頼した。その結果、92%の中高等部生徒が、「以前と比べて家庭学習の大切さを理解し、意欲的に取り組むようになった」と回答し、86%の保護者が、「昨年と比べて、我が子が自ら家庭学習に取り組むことができるようになった」と回答した。88%の中高教職員が、「家庭学習に関するアンケートの結果を基に、一人一人に応じた家庭学習の在り方について、必要な支援や指導を行うことができた」と回答した。一方、家庭学習の必要性は理解しているものの、継続的に取り組むことができていない生徒もいた。今後は、家庭学習を習慣化させるための具体策を検討する必要がある。	家庭学習が継続的に進められるように、一人一人に応じた具体的課題や手だてを提案する。教科担当や担任だけに任せるのではなく、学部全体で方策を協議し、実践につなげる。
2 生徒指導	交通安全指導・避難訓練・自立活動等を通して、適切な判断のもとに安全な行動ができる幼児児童生徒の育成を図る。	非常事態の発生時、幼児児童生徒自らが判断できる力の育成を目標に、警察や外部講師と連携を図りながら、危機的状況における対応に関して指導した。91%の担任・指導部教員が、対応訓練の事前事後に幼児児童生徒の状況に合わせて指導したと回答した。また、担任から見て、幼児児童生徒の95%はある程度理解していると判断している。しかし、高等部の生徒の中には非常事態が自分の身の回りで発生したときの、対応方法が分からないことが多いと回答しているものがあり、個に応じて支援していく必要がある。	各学部の発達段階に応じた指導が必要である。そのため、さらに外部との連携を図り、具体的な事例をもとに危機管理能力の育成に取り組む。 また、避難訓練等を通して、教職員の防災意識を高めるよう努める。
3 進路指導	生徒対象ガイダンス、進路コーナーの充実、進路便りの発行などを通し、進路意識を高める。  進路相談会や移行支援会議を開き、家庭や関係機関との連携を深める。	進路日より2学期までに3回発行したが、内容等に新鮮みは少なく、生徒の啓発には不十分だったと思われる。ガイダンスはHRや自立活動の時間を利用し、2・3年生とも数回行い、時期に応じた指導をおこなった。数字では判断しがたいが、進路についての意識付けや基礎的知識の定着には一定効果はあったと思われる。  「進路について話し合ったり、生徒への指導を行ったりすることができた」という項目について、生徒・保護者・教職員ともほぼすべてがB以上の評価になった。生徒との実習前の面談や事後面談を行ったこと、生徒を通じて実習先の決定に保護者との相談をうながしたことが、就職先の決定では移行支援会議だけでなく、必要に応じて個別に保護者と連絡・確認等を密に行ったことなどがこの結果に結びついていたと思われる。	次年度は特に高等部生徒数が減少し、今までどおりの全体的な指導や行事の開催が困難になるとと思われる。学年や各生徒の希望に応じた個別の指導を中心に、よりきめ細かく、具体的な対策を考える。また、ここ数年築かれてきたいくつかの企業とのつながりが一旦弱まることも予想されるので、職場訪問を強化し、できるだけ維持に努める。
4 保健管理	健康観察・健康診断をおとして自らの健康状態を把握し、適切に行動できる児童生徒を育成する。  清掃の指導や支援を行い、環境美化に取り組む態度を育成する。	91%の教員が、幼児児童生徒が自らの健康状態を把握できるような働きかけをしており、児童生徒も83%が、自らどのようにすればよいか判断したり相談したりすることができていた。保護者の回答においても83%が、子どもが適切に行動できる様子が見られたとのことで、今後も保健に関してのいろいろな機会を通して啓発していく。  子どもたちと一緒に清掃を行っているすべての教員が、子どもたちに環境美化に努めるような働きかけを行っており、85%の子どもたちが、自ら清掃に取り組むことができていた。ただ、時間いっぱい清掃に取り組んでいると回答した生徒は40%だったので、教員の指導も含めて、掃除時間いっぱいまで活動することが課題である。	身体の具合が悪いときに、どのようにすればよいか判断できなかったり、相談できなかった児童生徒に対しては、必要に応じて個人的に指導するなど、一人一人に沿った保健指導を継続して行っていく。  通常のコレクションで早く終わった場合は、さらに丁寧に行うようにする、いつもはやっていないところをきれいにするなど、清掃活動の指導を工夫する。

<p>5 センター的 機能</p>	<p>聴覚障害児支援を進めるために本校の教育活動や相談・支援について、関係機関へ啓発活動を行う。</p> <p>目標：関係機関に対して10件以上啓発活動を行う。</p>	<p>啓発活動のための訪問を8件、研修会を5件、合計13件の啓発活動を実施することができた。説明や研修会を受けた保健師や園・学校関係者の100%が「大変理解できた・ある程度理解できた」、98%が「聴覚障害がある（ありそうな）お子さんと関わった場合ろろ学校等の専門機関に必ず・できるだけ相談してみようと思った」という回答であった。この結果から、本校の教育活動や支援についての理解を深めてもらうことができたと考ええる。特に、研修会では、難聴擬似体験を行ったことや本校の聴力検査室・支援室を見学したことが好評で、より理解が深まったと思われる。</p> <p>ただ、乳幼児健診担当保健師や聴覚障害児に関わる教職員等の関係者は年々替わっていくので、今後も引き続き啓発活動は必要である。</p> <p>しかし、多くの訪問や研修会を実施することは、旅費の問題や支援部員の負担が大きい。</p>	<p>嶺南（小浜・敦賀）及び嶺北（本校）で実施している研修会を4年周期で計画的に実施する。</p> <p>関係機関への訪問については、主要の保健センターや耳鼻科医に絞って、計画的、効率的に実施する。</p>
<p>6 図書・研 究・情報</p>	<p>希望図書の購入・貸出文庫の借受による図書の充実、図書紹介や展示の工夫、学級文庫の奨励など、より良い読書環境を工夫する。</p>	<p>今年度の具体的な取組は、児童生徒の興味関心や読書力を考慮した図書の選定・購入、特設コーナーの設置や本の平置きなど陳列の工夫、学級や廊下、寄宿舎など手近な場所への図書コーナーの設置、おすすめ本の紹介、学級や家庭における読み聞かせの推奨などである。</p> <p>取組の結果、読書環境を工夫することが「十分できた」「おおむねできた」と答えた教職員が81%であり目標を達成した。また、図書室は前と比べて「とても本が選びやすくなった」「選びやすくなった」と答えた児童生徒が95%、学校の本を「20冊以上読んだり借りたりできた」と答えた生徒が85%であったことから、取組が児童生徒の読書意欲の向上につながったのではないかと考えられる。さらに、挿絵の多い図書や良作漫画の購入もきっかけになったと考えられる。</p> <p>これらの取組を通して、これまで本を全く借りることがなかった生徒が図書室に足を運んで本を借りるようになったことや、楽しそうに本を選んだり読んだりする児童生徒が増えたことなど、児童生徒の読書行動に変容が見られた。</p>	<p>図書室に足を運ぶきっかけができたので、今後も児童生徒が読書の幅をもっと広げ、読書を好きになるように取り組んでいきたい。そのためには、学部・寄宿舎・保護者と連携し、個々の児童生徒の読みにおける困難性や発達段階、嗜好や経験などに合わせて、校内の読書環境を工夫していきたい。</p>
<p>7 寄宿舎指導</p>	<p>基本的な生活習慣を身につけさせ、児童生徒が、将来の社会生活に向けて、自らが考え行動できるよう支援する。</p> <p>個々に応じて、コミュニケーション能力や社会性を高めるための指導を工夫し、保護者や学校との連携を深める。</p>	<p>支援計画に基づき、担任と連携しながら個々の状況に応じた生活指導を行ってきた。また、毎月の舎生会では、月ごとにテーマを設けて話し合い、全体指導を行ってきた。話し合った内容を、個々に作ったノートに綴るようにしたほか、掲示板に掲示して、日々の生活の中で意識していけるよう工夫した。</p> <p>指導員は、子ども達が舎の日課の中で、自ら気付いて行動できるよう支援することが「できた17%」「おおむねできた83%」と回答した。40%の舎生が、舎の日課の中で自分で考えて適切に行動「できるようになった」と回答し、60%の舎生が「だいたいできるようになった」と回答している。</p> <p>ホワイトボードの利用を継続し、個に応じて「ことば」の獲得や場に応じた「伝え方」の指導に活用した。</p> <p>子ども達が生活の中で適切なことばで伝えられるよう、指導員は個々に応じて支援することが「できた17%」「おおむねできた83%」と回答し、舎生は、自分の意思や困ったこと、身体の不調など、相手に応じて適切に伝えることが「できるようになった40%」「だいたいできるようになった40%」「少しできるようになった20%」と回答している。</p> <p>互いの良いところを記入し合う昨年度からの取組は、形式をノートからメッセージカードに変え、継続してきた。カードを記入し直接手渡すことで、互いを認め合い、よりよい「仲間づくり」につながっている。カードは個々のノートに差込めるようになっており、学期末には家庭に持ち帰り、家族にも見てもらい、カード記入にも協力をいただいた。</p> <p>担任と連携し、地域の関係機関との情報交換を行った結果、必要な支援に対する共通理解を深めることができた。</p>	<p>教育支援計画に基づいた舎の支援計画を継続・活用し、個々の将来の目標に応じた指導を行う。</p> <p>学年や個々の実態に合わせた支援を継続し、生活経験を積み重ねることで、生活の技術や自ら行動しようとする意識をさらに高められるよう努める。</p> <p>次年度は舎生の進級・進学により、寄宿舎生活における活動時間が、今年度に比べ限られてくる。反面、個々の目標の幅は広がるため、活動の持ち方を検討していくことが必要である。</p> <p>個々の日課の流れを見直し、個々の目標に合わせた活動と寄宿舎生活における集団活動の両立を図れるよう、時間や内容を工夫していく。</p> <p>今後も継続して、児童生徒の状況を把握し、担任と共通理解を持ち、家庭や寄宿舎で安定した生活が送れるよう地域の関係機関と情報交換を行う。</p>